

特定非営利活動法人 太平洋戦史館

戦史館だより

2017年10月1日発行
戦史館事務局〒029-4427
岩手県奥州市衣川区陣場
下41 髯オフィス花岡
編集発行人 花岡千賀子

会長理事 岩淵 宣輝 専務理事 大瀧 久治 ☎0197-52-3000 FAX 0197-52-4575

第16回通常総会 9月16日（土）無事開催



総会をはさみ、前日は北朝鮮による弾道ミサイルが日本の上空を通過し、続いて台風18号も日本列島を縦に通過、国際情勢も気象も“心配”が通過した週末でした。

日本政府は、北朝鮮に「圧力と制裁」さらに「断固として最大限の圧力を！」と危機をエスカレートさせるばかりです。これだけアブナイのだから日本も武装を強化せねば…とアメリカから、どんなに高額でも超高性能な武器を売っていただいて、自衛隊を武装させよう…と世の中まさに“開戦前夜”のようです。でもちょっと待って！ こんなときこそ戦史館の活動の原点に立ち返って冷静に考えてみましょう。

戦史館会員の多数は身内が戦争で犠牲になっていて、いったん戦争が始まってしまうれば誰にも止められないことを身に染みているはず。戦争に勝者は無く、皆が犠牲になることも体験しています。70数年前の日本は、誰も開戦を止めることができなかつたけれど、今ならまだ止められる。ベツタリと米国にへばりつき「圧力と最大限の制裁を」と繰り返すのをやめ、日本は国際社会に向けて“避戦”のための「対話」を呼びかけてほしい。

北朝鮮の人々は、本当はどんな思いで暮らしているのでしょうか？ 首都ピョンヤンの街頭インタビューで「米国が攻めてきたら、夫と一緒に包丁で突き刺してやる」と言っていた勇ましい女性の映像。70数年前の日本でも「敵が攻めてきたら竹槍で…」と練習したのですよね。ミサイルを開発した技術者たちのパレードに動員され、造花を振るチマチョゴリの女性たち。かつての日本でも真珠湾奇襲のニュースに、紋付き袴姿でちょうちん行列している写真を見たことはありませんか？ 日本は大東亜共栄圏として、朝鮮半島を植民地にして、この地に暮らす人々を「天皇の赤子」と呼び、朝な夕な「皇国臣民の誓詞」を唱和させ、「宮城遙拝(きやうじやうはい)」を強制した暗い歴史があります。開戦前夜の今こそ勇気を持って“官民合同の使節団”を送り、対話に取り組んで北の暴走を止めること。これがかつて植民地にしてしまった国への、日本の償いではないのでしょうか？ 今こそ。

特定非営利活動に係る事業会計収支報告書

2016年度特定非営利活動法人太平洋戦史館 2016年8月1日から2017年7月31日まで

16期収支予算(一般会計)

2017年8月1日～2018年7月31日まで

科 目 ・ 摘 要			金 額 (単位:円)			金 額		
I 収 入 の 部	1. 会費収入 () <small>(内)座席費</small>			552,000			468,000	
	正 会員[3,000×164] (17%)	492,000			420,000			
	会報会員[1,200× 50] (5%)	60,000			48,000			
	賛助会員[30,000 ×0] (0)	0			0			
	2. 寄附金収入 (1,296,370)	1,209,070	1,209,070		1,400,000	1,400,000		
3. 事業収入(編 織棚 額) (26,880)	26,580	26,580		30,000	30,000			
4. 特別会計残から繰入 ()	300,000	300,000		167,212	167,212			
当期収入合計				2,087,650			2,065,212	
II 支 出 の 部	1. 事業費			1,201,841			1,180,000	
	専従者給与 (960,000)	600,000			600,000			
	旅費交通費 (199,618)	101,054			100,000			
	送料通信費 (270,921)	253,686			220,000			
	出版発行費 (124,740)	81,000			80,000			
	調査研究費 (61,595)	45,351			50,000			
	展示館光熱費 (61,318)	64,272			60,000			
	事務消耗品費 (36,300)	56,478			50,000			
	現地協力費 (0)	0			20,000			
	2. 管理費			849,631				830,000
	会費・会議費 (7,655)	57,833			40,000			
	施設使用料 (600,000)	600,000			600,000			
	管理諸費 (197,632)	172,288			170,000			
雑費(編織棚額) (19,210)	19,510			20,000				
租税公課 (2,860)	0			予備費20,000	20,000			
3. 借入金返済 (0)	0	0		返済 100,000	100,000			
当期支出合計				2,051,472			2,130,000	
当期収支差額				36,178			▲64,788	
前期繰越収支差額				28,610			64,788	
次期繰越収支差額				64,788			0	

総会で予定された議案は全て承認されました

毎年7月下旬に発送していた会報を今年は制作できなかったため、往復葉書で総会案内を160枚出しましたが140人もの正会員の皆さんから返信戴きました。委任状による多数の出席と19名の実出席ありがとうございます。戦史館の会員数は前年より20名減少し、活動も厚労省の委託事業が終了し、新法人の一員としても、インドネシアと日本の覚書協定が進展しなかったことで身動きが取れないまま年度が終了しましたが、会員一人一人の葉書の文面からは、変わらぬ思いが伝わってきました。身動きがとれない年の費用は極力削った結果ですが、一般会計で2,051,472円の費用が発生したのに、収入は1,787,650円。その差額は特別会計の残額から30万円を繰入れることで解決しました。特別会計というのは2010年から2016年までの厚労省委託の未送還遺骨情報収集事業の収支ですが、一般会計と別に処理し、厚労省の点検を経て決算額が決まります。この決算額と、実際に消費税を納税した後の金額には差額が発生するのですが、その累計は約140万円。この残金の処理は岩手県から「最終的に事業の終了後に残金があった場合は一般会計に振り替えてよい」という指導を受けたことで、前年度の赤字分を補てんできました。これまでに専従役員から借入れした金額は80万円残ったままですが、新たな借入金の発生はありませんでした。

写真展…総会 会員の活動報告より抜粋

2007年夏にスタートした写真展は、大阪、鯖江、高松、酒田、弘前、西宮へと回を重ね企画者だった横山さんが昨年亡くなった後、今年は徳島で阪本良子さん瀬野尾一江さんが中心になって開催されました。7月22日からの約1ヶ月の期間中に1620名が会場を訪れ、8月12日には『終わらない戦後、戦没者の遺骨収集への思い』というテーマで、お二人が講演しました。最初の頃は慰霊巡拝で訪れたビアク島マンドゥ地区で発見した日本兵の白骨遺骸が散乱している衝撃、その事実を多くの人に知ってもらいたいと始まった写真展ですが、回を重ねる度にプアイ村やベラップ村での未帰還兵の捜索や情報収集、遺骨帰還派遣に参加した写真も追加しながら、伝えたい内容はさらに広く深くなっていました。講演を聴いた参加者にとってお話と写真が合体したことで理解が一層深まった…こんな衝撃は初めて…など感想が寄せられています。総会で報告する二人の話の聴いた仙台在住の会員が、地元でも開催したいと熱心に質問をしていました。（写真は総会で活動を報告する瀬野尾さんと阪本さん）



新法人「日本戦没者遺骨収集推進協会」はどのように遺骨帰還を“推進”している？

新法人がスタートして1年。昨年から海外調査派遣は新法人に一本化されましたが、インドネシア、パプア州からの遺骨帰還とそれに伴う調査派遣は、日本とインドネシアの外交交渉が進展しないため、新法人の活動にまで、たどり着けていません。

新法人からは、日常のメールで“情報共有”として米国公文書館の資料調査で取得した膨大なナマ情報が添付されて届きます。各戦域ごとの現地調査派遣も少しずつ進んでいて各団体には、派遣者の推薦を促す文書や諸様式も郵便で次々と届きます。それには派遣する地域ごとの日程表や健康チェック質問票、宣誓書等がどっさり添えられていて、対象となる各社員団体が、団体ごとに派遣者を取りまとめるしくみになっているのですが、残念ながら、戦史館はインドネシア方面以外の派遣に応募できる資格がないのです。

一方、岩淵会長理事は新法人の理事として最初から加わり、定例理事会には毎回出席していますが、理事会の議題は、この法人の新社員の入会基準づくり見直しとか、旅費規定の改正とか、組織手続きについての議題ばかりが続くことに閉口し、新法人になって各戦域の帰還がどう進展したのか、外務省とどのように連携して遺骨帰還を進めているのか、他の省庁と“推進”できていない状況について、9月の理事会の場で問題提起しました。

さて岩淵さんは9月21日～10月3日の日程で硫黄島戦没者遺骨収集「掘削立会い派遣」に出発しました。戦史館ではインドネシア方面の調査派遣以外は応募できる資格がないと書いたばかりですが、なぜOKなの？と皆さん思いませんか？それは他団体の参加予定者の都合が悪くなり、その団体が派遣できる人数枠の中に、その一員として参加が決まったからです。同団体の枠で12月にパラオ共和国ペリリュー島の調査派遣にも参加予定とか。インドネシア方面調査派遣は見通しがたたない状況ですが、パラオはビアク島やスピオリ島から非常に近い位置にあるのです。詳しくは次の戦史館だより 112号で報告します。